



真宗高田派本山 専修寺

高田本山だより

令和4年 冬号

132



高田本山 HP

令和4年冬号（第132号） / 発行・令和4年12月10日 / 〒514-0114 三重県津市一身田町2819番地 TEL 059-232-4171 www.senjuji.or.jp

十一月八日の夜は、地球の影に月が隠される皆既月食と、月の後ろに惑星が隠される惑星食が同時に起こりました。

次に日本で同時に見られるのは三十二年後といわれています。



『なもあみだぶつ』を聞くということ

高田派鑑字・誓元寺住職

栗原廣海



一、無量光明土

前回は、お経に説かれている「浄土」の風光を概観しました。美しく安楽な理想の世界が、言葉をつくして表現されていました。

今回は、宗祖親鸞聖人が、浄土についてどのように伝えてくださっているのかをうかがっていきたいと思います。聖人は『教行証文類』「真仏土文類」の最初に、

謹んで真実の仏と浄土をうかがうと、仏は思いはかることのできない光明の如来（不可思議光如来）であり、浄土はまた限らない光明の世界（無量光明土）である。

と言われ、また末尾には、

真実の浄土とは、『平等覚経』

（『無量寿経』の異訳）には「限

りない光明の世界（無量光明土）」と説かれ、また『如来会』

（『無量寿如来会』、『無量寿経』

の異訳）には「あらゆる智慧

をそなえた世界（諸智土）」と

説かれている。

と述べられています。真実の仏とその仏がおられる浄土は、ともに私たちの思量を超えた、限らない光明そのものであり、智慧そのものであると言われるのです。お経に説かれていた浄土の風光とはずいぶん違いますね。

また聖人は、『唯信鈔文意』のなかで、真実の仏や浄土のことを

「いろもなく、かたちもない。だからここに思うこともできないし、言葉にあらわすこともできない」と言われ、『弥陀如来名号徳』にも、「ここに思うこともできないし、言葉にあらわすこともできないから不可思議光仏と言うのである」と言われ、

「一念多念文意」には、「この如来は光明である。光明は智慧である。智慧はひかりのかたちである。智慧はまたかたちがないから不可思議光仏と言うのである」と言われ、

光明はすなわち思量や言葉を超えた「智慧」そのものであることをお示しく下さっています。お経には、その美しさ、安らかさが、私たちがかかる言葉で情緒的に表現されていたのに、聖人は、仏や浄土は私たちの認識を超えた、はかり知れない智慧を象徴する光のような存在であり世界であるとおっしゃっているわけです。これらのお示しは、一見、お経に説かれていた浄土を否定されているかのようにも見えてしまいます。いったいどういふことなのでしょう。

御本山御用達

鍵長法衣仏具店

京都市下京区油小路正面東入（中央局区内）
電話 (075) 371-0854・8181～2番
FAX (075) 344-2701番
振替口座・0170-3-972番 郵便番号600-8344

創業1586年



松井建設株式会社

取締役社長 松井隆弘

執行役員支店長 野村守宏

本社 東京都中央区新川一丁目17番22号 ☎03-3553-1150
名古屋支店 名古屋市中区栄五丁目28番12号 ☎052-249-4771

二、分別と無分別

真実の仏や浄土が、いろもかたちもなく、思量や言葉を超えた「光明」であるとか「智慧」であるとか言われるのは、真実の世界は私たちの分別を超えた「無分別」の世界だからです。

「無分別」——私たちの常識からすれば、分別がないこと、つまり無思慮で、あとさきを考えないで軽率な行動をすることですね。決してほめられたことではありません。つねに「分別心」をもって語り、行動することが、私たちの世界では求められます。

この「分別」は、「ぶんべつ」と読む場合、「ゴミの分別」のように、種類によって分けて区別することですが、「ぶんべつ」と読む場合も、やはり分けて区別することを意味します。この場合は「ゴミ」ではなく、是非・善悪・正邪・好悪などを区別するのですが、同時に、認識する主体とその対象を分けるという事態がその背後にかならずあります。「私が」外界のものを見たり聞いた

り、嗅いだり、味わったり、触れたりして、これらを自らの中に取り込み、好き嫌いや善悪などの価値判断をするのです。

これがくせ者なのです。なぜなら、そこにはかならず主観がはたらき、異なった価値観を生み出すからです。一つのものを見ても、その見方は見る人の数だけあり、同じものを見ているのに、見る人の数だけ違うものが存在しているということになります。私たちは、自分の都合でしかものを見ることができず、そのために対象をありのままにとらえることはできないのです。つまり、私たちの「分別」で真実を知ることが、不可能なのです。真実の仏や浄土は、認識する主体と対象を分け、対象を自らに取り込んで価値判断する私たちの思量ではとらえられない世界であるということ。すなわち「分別」を超えることは、真実の世界へは到達できません。

では「分別を超える」とは、どういうことなのでしょう。それは、この「分別」から、認識主体とそ

の対象という区別を取り去ることです。それは、言葉による思量を超えて、認識する自己と対象との区別がないこと、不二であることを直観していくことです。それが「無分別」ということであり、対象と一つとなつてありのままに受け入れ、知ることのできる智慧を「無分別智」と言います。この智慧によつて、はじめて真実の仏や浄土を知ることができるのです。

「いろもかたちもなく、こころに思うこともことばにすることもできない」と聖人がおっしゃったのは、真実の仏や浄土は「無分別智」によつてこそ知ることのできる境界であり、私たちの「分別」ではとらえることのできない世界であることをお示しくされたのです。

では、ことばで情緒的に語られる美しく安らかな浄土はどう理解すればいいのでしょうか。このような浄土は真実に導くための方便、つまり手だてとして説かれていると理解されるのですが、紙面が尽きましたので、次回を期したいと思います。

日本古来より伝わる土壁の家づくりと伝統建築の保護・再生
土壁・漆喰・電の伝統技術を守り継承していきます

一層築舎

Sochikusya Co., Ltd

〒510-0031 三重県四日市市浜一色町 16-35

TEL 059-332-1444 FAX 059-344-2627

E-mail : souchikusya@gmail.com URL : <https://tutikabe.net/>

法衣・仏具製造及び販売



井筒法衣店



代表取締役社長 今岡規代
●本社
600-8468
京都市下京区堀川通
新花屋町角(西本願寺前)
Tel 075-351-1234
0120-075-720
Fax 075-341-7905
●東京店
160-0008
東京都新宿区四谷
二栄町十四番地11
Tel 03-3358-1500
Fax 03-3359-8902

オンラインショップを開設しました

2023 年お七夜行事予定

1月9日 (月)	12:30 はたちの集い 12:30 速夜勤行・説教① 12:50 お七夜高田派青年会 16:30 初夜勤行・説教②
1月10日 (火)	07:00 晨朝勤行・説教③ 10:30 日中勤行・説教④ 12:30 大講堂説教⑤ 14:00 速夜勤行・説教⑥ 16:30 初夜説教⑦
1月11日 (水)	07:00 晨朝勤行・説教⑧ 10:30 日中勤行・説教⑨ 12:30 大講堂説教⑩ 13:00 お七夜婦人連合会 14:00 速夜勤行・説教⑪ 16:30 初夜勤行・説教⑫
1月12日 (木)	07:00 晨朝勤行・説教⑬ 10:30 日中勤行・説教⑭ 12:30 大講堂説教⑮ 14:00 お七夜坊守会 14:00 速夜勤行・説教⑯ 16:30 初夜勤行・説教⑰
1月13日 (金)	07:00 晨朝勤行・説教⑱ 09:00 特別講演⑲ 10:30 日中勤行・説教⑳ 11:45 責任役員会 12:30 大講堂説教㉑ 14:00 速夜勤行・説教㉒ 16:30 初夜勤行・説教㉓
1月14日 (土)	07:00 晨朝勤行・説教㉔ 09:00 特別講演㉕ 10:30 日中勤行・説教㉖ 12:30 大講堂説教㉗ 14:00 速夜勤行・説教㉘ 16:30 初夜勤行・説教㉙
1月15日 (日)	07:00 晨朝勤行・説教㉚ 10:30 日中勤行・御親教・復演㉛ 12:30 大講堂説教㉜ 14:00 速夜勤行・説教㉝ 16:30 初夜勤行・説教㉞ 16:30 お七夜婦人連合会初夜参詣 19:00 白塚通夜講 23:00 後夜勤行
1月16日 (月)	07:00 晨朝勤行・説教㉟ 09:00 御参廟 10:30 日中勤行・説教㊱ 12:30 大講堂説教㊲

- 9日～15日 子ども竹あかり展（境内） ■9日～16日 お七夜献書展（大玄閣廊下）
 ■9日～16日 ののさまをえがこう展（対面所） ■9日～16日 雲幽園見学 10時・13時 ※ただし9日は13時、
 16日は10時のみ（集合場所 茶所）

報恩講説教一覧表（令和五年一月）

	晨朝 (午前7時)	日中 (午前10時30分)	速夜 (午後2時) 9日のみ(午後12時30分)	初夜 (午後4時30分)	大講堂 (12時30分)
9日 (月)			①田中 唯聴 鈴鹿市 欣念寺衆徒 「えらばず きらわず 見すてず」	②佐藤 弘道 津市 浄徳寺副住職 「ごめんなさい、ありがとうございます」	
10日 (火)	③生桑 崇等 津市 来照寺衆徒 「外儀のすがた」	④真置 信海 松阪市 法性寺副住職 「親心 なもあみだぶつ」	⑥中村 宜成 四日市市 光輪寺住職 「信心すなわち一心なり」	⑦水谷 忍英 鈴鹿市 本照寺住職 「なまんだぶ」	⑤松田 信慶 和歌山市 崇賢寺住職 「いのちのゆくえ」
11日 (水)	⑧北畠 心淳 鈴鹿市 称名寺副住職 「唯仏是真」	⑨栗廻 隆興 四日市市 誓覚寺住職 「蛇蝎奸詐のころにて」	⑪安藤 純海 岡崎市 蓮珠寺住職 「光の中で」	⑫鷺山 了悟 津市 真楽寺住職 「金子みすゞ「報恩講」	⑩花山 光瑞 明和町 迎接寺住職 「生かさるる命」
12日 (木)	⑬藤井 徳雄 鈴鹿市 了性寺住職 「起ちて更に衣服を整う」	⑭藤浦 弘導 鈴鹿市 浄国寺住職 「あなたならどうする」	⑯金森 顕宏 大野市 専福寺住職 「名前の救い 南無阿弥陀佛」	⑰岡 知道 四日市市 立法寺住職 「よび声ときく耳」	⑮戸田 恵信 岡崎市 浄泉寺住職 「親鸞聖人と聖徳太子」
13日 (金)	⑱水沼 碧水 津市 玉保院衆徒 「健康寿命？」	⑳浦井 宗司 鈴鹿市 深蔵寺住職 「御開山聖人も誕生と私」	㉑隆 妙灑 四日市市 浄福寺住職 「本願の救い」	㉒里榮 秀教 鈴鹿市 法林寺住職 「阿弥陀さまのよび声を聞きましょう」	㉓島 義厚 大阪市 聖賢寺住職 「善導独明佛正意」
14日 (土)	㉔安藤 章仁 岡崎市 妙源寺住職 「親鸞聖人の立教を仰ぐ」	㉕田中 明誠 鈴鹿市 欣念寺住職 「三方よし」	㉖大河戸 悟道 豊橋市 正太寺住職 「帰るところ」	㉗千草 篤昭 津市 善休寺住職 「浄土真宗に帰すれども」	㉘芳川 賢史 津市 報恩寺住職 「兵戈無用」
15日 (日)	㉙藤田 正知 津市 延命寺衆徒 「聖道の慈悲と浄土の慈悲」	御親教	㉚鈴木 紀生 津市 浄福寺住職 「にちにち感謝」	㉛松山 智道 鈴鹿市 随願寺住職 「尊重すべきは世尊なり」	㉜藤澤 真純 松阪市 明照寺住職 「浄土に往生する」
16日 (月)	㉝戸田 栄信 岡崎市 浄泉寺衆徒 「死んだらどうなるの」	㉞真昌 智海 鈴鹿市 真念寺前住職 「お念仏のころ」			㉟安田 真源 京都市 安立寺住職 「無碍の光明」 無自覚な私

特別講演 (如来堂 午前9時)

13日 (金)	⑲梅林 久高 鈴鹿市 正念寺住職 輔講 「親鸞聖人の晩年」
------------	--

14日 (土)	㉚新 光晴 津市 東海寺住職 鑑学 「『窪田御山御再興記』 - 国宝御影堂・如来堂の記録 -」
------------	---

復 演 (御影堂 御親教後)

15日 (日)	⑳栗原 廣海 四日市市 誓元寺住職 鑑学 復 演
------------	-----------------------------------

特別法要
事務局だより

第五回

宝物館の今後の公開予定

宝物館では今後、定期的な法宝物の展示のみならず「VR」という仮想現実を用いた最新映像技術で、極楽浄土や真宗の教えをわかりやすく説明してまいります。

そしてこのたび京都大学総合博物館や三重県総合博物館で館長をされていた大野照文^{おののてるふみ}さんが、新宝物館の館長に就任いたしました。

今後はその知識や経験を活かして、

運営を担ってまいります。

また新宝物館では、高田本山が所有する法宝物だけではなく、他宗派所有の法宝物や高田派所属寺院の貴重な資料などを展示する展覧会を定期的に開催する予定です。

この新宝物館のオープンは令和5年5月21日の予定です。

それに先立ちまして、同年1月9日から2月16日まで文化財活用（VR）

室を一部公開いたします。

期間中は文化財活用（VR）室で、参拝者向けに最新映像技術で表現された極楽浄土の世界を体感いただけれます。

この文化財活用（VR）室は仏教研究の場所として各別院、各末寺とネットワークをつなぎ、研修や講義などが行える施設としての活用も検討しております。

また来年5月21日から6月18日まで
の間「知られざる専修寺の至宝 親鸞聖人の門弟がつないだ高田派八百年」と題しまして、第一回目の企画展を開催いたします。

両期間中とも一足先に最新映像技術をご体験いただける機会ですので、是非ともご来館ください。

故きを温ねて新しきを知る

法宝物は阿弥陀仏の教えを学ぶ貴重な遺産であり調査・研究が必要な大切な資料です。新宝物館建設中の現在、これらは三重県総合博物館にて大切に保管されております。

そこで今後の調査・研究のためこの機会を利用し特別法要記念行事のプロジェクトとして、高田本山スタッフに

よる博物館内での法宝物の撮影、画像のデジタル化およびデータベース化作業に取り組んでおります。

法宝物の中には傷みが激しいものもあり、細心の注意を必要とする作業もございますが、三重県総合博物館のご協力により安全に撮影が行われております。

またこれら貴重な資料はアーカイブ（保存記録）することによって未来永劫残すことができます。このプロジェクトは将来的に、このデジタル資料の貸し出しに役立てることも視野に入れた取り組みでもあります。

永田文昌堂	
発菩提心論 新刊 —浄土仏教思想の視座— 武田 龍精著 定価 12,100 円（税込） 主に法然浄土仏教における発菩提心観の思想論的意義を中心に、大無量寿経、曇鸞往生論註、道綽安樂集、善導観経疏、源信往生要集、親鸞教行証文類に焦点を絞り、発菩提心の思想を考察する。	念仏申さるべし 新刊 藤枝 宏壽著 定価 2,750 円（税込） 有縁の門信徒に送られる「揭示法語」、エッセイ風の法話「心のしおり」、やや専門的な法話「群萌」、口述の法話・講演をほぼそのまま記録した「法話」の四部構成で七十九篇を収録。 また巻末の付録に念仏への道程を掲載し、「念仏申さるべし」の願いをわかりやすく伝える。
京都市下京区花屋町通西洞院西入 ■TEL 075-371-6651 ■FAX 075-351-9031	

「夢のお告げ」

聖徳太子は亡くなれると間もなく信仰の対象として仰がれるようになりました。その遺徳から願いを叶えてくれる観音菩薩の化身としても敬うという聖徳太子信仰は、奈良時代に皇族や僧侶の間で広まり、中世には一般の人々にまで広まりました。

夢告とは、単なる空想ではなく「夢のお告げ」という言葉があるように、人々が様々な問題を抱えてどうしたらいいかわからなくなったとき、その解決の道を祈り、佛さまからご教示を授かるという貴重な意味を持つていました。

聖徳太子が建立したと伝わる京都の六角堂（頂法寺）は、如意輪観音を本尊としており、夢告を授ける救世観音としても知られていました。

聖徳太子を深く尊敬していた親鸞聖人も、比叡山での二十年間の修行の行き詰まりのなかで、争いの絶えない世を深く悲しみ、佛教をよりどころとして生き、人々にその教えを広めようと力を尽くされた聖徳太子に、自分の歩むべき道を教えてもらおうと、六角堂に参籠されたのでした。参籠とはお堂にこもって夜を徹してご本尊に祈ることです。

建仁元年（一一〇一）、二十九歳の親鸞聖人は、六角堂に百日間の参籠に入り、九十五日目の明け方に救世観音の夢告を授かりました。その夢告は親鸞聖人の門弟であった真佛上人書写の『親鸞夢記』（専修寺蔵）として記されています。

人間として生きる限り誰もが抱えている、どこまでも自分を中心としながら、あらゆるものを傷つけて生きるあり方の罪の深さに悩まれた親鸞聖人にとって、六角堂での夢告は、その後の歩みを方向づける大きな意味を持つものでした。

そして夢告に導かれて京都の東山、吉水の草庵に法然上人を訪ねられ、僧侶だけでなく貴族、武士、農民や商人など、すべての人々が、罪業をかかえた身のままで共に救われていく専修念仏のみ教えに出遇われたのです。

親鸞聖人は救世観音の化身としての聖徳太子の導きにより、法然上人に出遇い、「建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」（『顕浄土真実教行証文類』）と、今までの佛道修行を棄てさり、ただ阿弥陀佛の本願を信じ、お念佛を称えて生きる親鸞聖人の佛道を歩む原点となったのが、六角堂の夢告だったのです。

（教学院第三部会）



真佛上人書写の『親鸞夢記』（専修寺蔵）

（頂法寺）は、如意輪観音を本尊としており、夢告を授ける救世観音としても知られていました。

聖徳太子を深く尊敬していた親鸞聖人も、比叡山での二十年間の修行の行き詰まりのなかで、争いの絶えない世を深く悲しみ、佛教をよりどころとして生き、人々にその教えを広めようと力を尽くされた聖徳太子に、自分の歩むべき道を教えてもらおうと、六角堂に参籠されたのでした。参籠とはお堂にこもって夜を徹してご本尊に祈ることです。

親鸞聖人は救世観音の化身としての聖徳太子の導きにより、法然上人に出遇い、「建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」（『顕浄土真実教行証文類』）と、今までの佛道修行を棄てさり、ただ阿弥陀佛の本願を信じ、お念佛を称えて生きる親鸞聖人の佛道を歩む原点となったのが、六角堂の夢告だったのです。

ニュース情報番組
Mieライズ
三重のとれたて情報をお届け。

毎週月～金曜日
17:40～生放送！

見る 知る 送る など
毎日の暮らしに役立つ
三重県情報が満載！

三重県の情報が
ぎゅぎゅっと詰まった
『三重テレビアプリ』
をダウンロードしよう！

三重テレビ放送

高田本山御用達
三重県仏教会御推薦
石碑
記念碑
燈籠

高級御影石専門店
御影石材株式会社
〈石に御用の方は〉
☎0120-142540

本店 津市広明町（影見寺門前）
☎059-284-1700（代）

かんべ
く神戸の御坊さんく
真宗高田派専修寺

神戸別院



近鉄鈴鹿市駅を南に徒歩5分ほどのところに、神戸別院がございます。昔は栄えた神戸商店街も今は近隣の大きなショッピングセンターなどに押され、随分静かになりましたが、その一角に山門、鐘楼堂そして大きな伽藍の昔ながらの佇まいを残しています。

昭和54年本山発行の「高田の寺々」によると、「高田派北勢における布教宣布の拠点として、堯円上人の御代に建立された。(中略)神戸の御坊(ごぼう)さんと

称して門信徒の間に親しまれ、特に報恩講執行に当たっては、付近の農村においては、農事を休日として、参詣することを楽しみ、(中略)特に満日中には、法主殿の御親修、御親教が行われ、管内護持寺院五十余カ寺の住職も臨時出勤奉仕して、盛大な法要が営まれる。」とあります。

私が別院に足を運びだした約30年前の平成初期の頃には別院に足を運ぶ篤信家の古老の方々がまだ何人もおられ、「私が若かったこ

ろのご坊さんの報恩講はそれは盛大やった。ご本山からご法主さんがお越しになる時は、神戸の駅からここまで参詣者がずらっと途切れることなく列をなしてお迎えした。その中を人力車に乗ったご法主さんが通られました。」と私に話してくださったのを今もよく覚えています。

時代は移り変わり今現在の別院であります。もともと別院には直檀家はなく、昔から護持寺院の住職と檀信徒によって守られているのですが、近年の社会生活の変化の中で、各寺院それぞれの檀家

も減少傾向にあり、その影響からか護持できない寺院もあり、別院護持寺院数も当時の50余カ寺から47カ寺に減り、人材的にも経済的にもかなり苦しくなってきたのが現状でございます。

そういった中、住職檀信徒の代表である評議員を中心に、この現



ある日の法要の様様

状について皆さんと話し合い、どう進めていくのかを考えながら進めているところであります。

法要についても、毎月8日の月例法要、春秋の讃仏会、追弔会、暁天法座、報恩講。また機関紙「神戸のご坊さん」発行や全体世話方会、婦人部の総会など、時代に合わせて少しずつ変わってきています。

厳しい社会情勢の中、お念仏の
抛りどころとして先代の方々から
守られてきた「ご坊さん」を今我々
にできることを協力し合いながら
歩んでいます。この現状から目を
背けないで、向きあつていく。そ
れによって皆の関わりができるよ
うに思えるのです。それをこの大



史蹟の説明文（明治天皇の御巡幸を受ける）

きな伽藍が教えてくれているので
はないかと思えます。
南無阿弥陀仏。

（文責 田中明誠）

行事案内

- 中興上人御正當 二月八日～十日
 - 得度式・住職拜命 二月十日
 - 修正会 一月一日～三日
 - 報恩講（お七夜） 一月九日～十六日
期間中行事は4ページ参照
 - 日本博VRで魅せる浄土の世界（予約制）
開催期間 一月九日～二月十六日
 - 住職補任研修会 二月二十五日～二十六日
 - 讃佛会 三月十八日～二十四日
 - 平等院殿一周忌法会 三月二十六日～二十七日
 - 写生大会 三月十八日～四月二日
- ※感染症対策として予定を変更する場合があります。
最新情報はホームページなどをご確認ください。

こんな行事がありました

- 讃佛会 九月二十日～二十六日
- 資堂講法会 十月一日～三日
- 布教伝道研修講座 十月七日
- 住職補任研修会 十月八日～九日
- 得度式・住職拜命 十月十日
- 組長会 十月十八日
- 教学院研究発表大会 十月三十一日
- 納骨堂法会 十一月三日・四日
- 秋法会 十一月五日～十日

お七夜（報恩講）を お迎えします

「高田の御門徒の間では、御
本山の報恩講のことをお七夜
といい馴染んでおります。報

そちようかい
組長会

安心・安全にご参拝いただくために



■感染拡大の状況により、予定している行事等の中止、延期又は規模縮小をさせていただく場合があります。 貴宗高田派本山 専修寺



恩講は真宗独自の
の呼称でありま
して、他宗では
御忌などの字を
当てておりま
す。報恩講とは
宗祖親鸞聖人の
御恩を報ずるた
めの講すなわち
あつまりのこと
で、聖人の御命
日旧暦の十一月

二十八日を、新暦（太陽暦）
に換算して、毎年一月十六日
御真影の御前で執行されま
す。忌日に行われるので御正
忌報恩講といい、またご法事
の在り方から七昼夜ともいい
ますが、高田ではお七夜と申
します。」

「この御正忌以前に末寺で
行われる報恩講を、お取越し

寺院名

お寺とともに
地域をつくる。

人口減少社会へ突入した地域に
必要なのは「お寺」だと思う。

対話から生まれる情報発信や
プロジェクトをサポート！

三重に暮らす・旅するWEBマガジン

OTONAMIE

otonamie \14,500フォロワー突破！

mail otonamie@gmail.com

tel 059-268-3538 (書印刷工業株式会社)



お寺の実績
紹介記事

『二期一会 坊守さんに語る』
真置俊徳著より